

熱い思いの若き日

(長澤先生の日記より)

この日記は一九五五年(昭和三十年)十月十五日より記載されたもので、十二月の記載当時建設事務官として産業開発青年隊ブラジル集団移住のため、現地受け入れ態勢整備を行うべく渡伯することとなり、煩雑な業務に忙殺されている時期である。

この渡伯に関して十二月初旬より課長を通じて上司に出張扱いを要請しておりその結果を課長から以下のように聞かされている。

「会計課は現職公務員のままでの出張命令を出すことは不可能であり、休職扱いとなる。何故なら建設省には海外旅費は全然無い。強いて大蔵省に交渉しても、建設省は未だ移民行政を行う段階に至っていないから、名目が立たない。そうすると出張命令は出して旅費を支給しないと会計法上違反になる」とのことである。

当時の課長がユーモアを交えて付け加えたのが

「それで病氣休暇にしたらどうだろう神経衰弱ということにして」

その場で聞いていた課員皆がどっと笑った。と記載されている。

その後いくつかの難問を自らの行動力で解決し渡伯実現にこぎつける箇所を見開いておくと――。

十二月十五日

旅券の交付があった、建設省の方は依然として結論がつかない。課長補佐級のところでは規則や法規を正確に解釈するより方法がないので、どうにもならない。

午後から青年館で富山キャンプに行った講師が集まって青年隊員移住者の選考決定の懇話会を開いた。最終決定をした。また青年隊の契約その他の責任は青年協会とする。手続きは領事館を通じて行う：

十二月十九日

進藤武左エ門に會ったらもう帰ってくるな、君みたいな

優秀な活動力のある若い者がどんどん南米に進出しなければ駄目だ。もし帰ってくるなら手ぶらで帰ってきたら承知しないぞと言って四、五人主だった人達や関係者を紹介することを約束された。渡航手続きや準備も愈々具体的になり忙しくなってきた。

外務省で予防注射を打つ。

十二月二十日

三時から毎日新聞社主催人口問題調査会で壮行會をやってくれた。

課長が計らいで伊那・寺田氏と四人で新宿廣島屋で壮行會をやってもらった。お互いに気心わかったしかも毎日顔を合わせて仕事を推進している同志の心からの壮行會である。

歓談つきず課長の高山彦九郎寺田さんの月形半平太、門

出の歌と激励の余興つきず十一時近くまで飲む。

十二月二十四日

課の忘年会と壮行會を兼ねつつ総合計画課は伊東温泉に行くこととなった。

課員は十二時に観光バスで出発した。僕はあちこちと雑用を終え、三時の湘南準急で出発。

僕の休職処置問題についても最後にして局長に挨拶に行つて、建設省の青年隊の公務を遂行する任務を果たす場合、休職者としてはどの程度に局長代理の権限を与えられるか。公務委任の文書が欲しいと言明したので、局長も心配して遂に出張命令が出された。

「産業開発青年隊員ブラジル集団移住の受け入れについての契約及び受け入れ態勢の調査等の目的を持って昭和三十年十二月二十八日より昭和三十一年六月十日までブラジル国に出張を命ずる

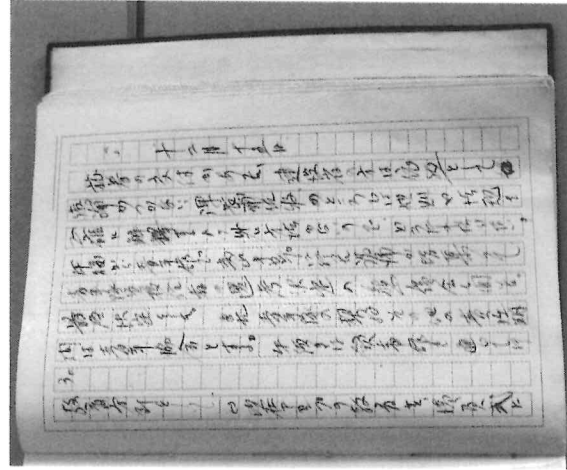
任命権者 建設大臣 馬場元治」

旅費は自己負担、これよいのだ、奮れたる出張であれば金は何とでもなる。この紙片一枚がどれだけ勇気づけるものか

旅費についても最初は五里霧中であつた、査証をとるための書類に理事長のサインをもらおうかとなしたり、駄目だといいつつ協会が旅費負担とあるが、そのメドをつけているかどうかそれをはっきりしないうちはサインしないとい



松下村塾で対談する
保利建設大臣と長澤先生



う。さあ伊原氏が報告しても駄目、課長が報告しても言明出来ず、遂に伊原氏が借金立替、課長は奥さんの貯金を立替というところまでして、一方土建業界からの寄付集めのメドがついたところで漸くサインしてくれた。

課長が起案して建設省在官あてに出した概文は

拝啓、日毎に寒気を加えて参りましたが益々御清祥に涉らせられお慶び申し上げます。

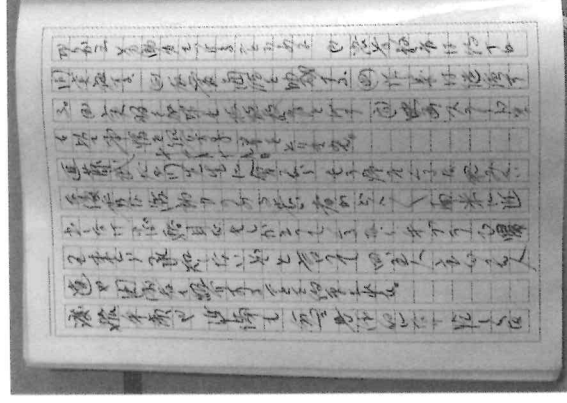
さて、産業開発青年隊の育成につきましては、昭和二十八年度テストケースとして発足以来格別の御協力を戴き、お陰様で年毎に人員の増加を見ますと共に修了者は国土建設事業の現場作業に邁進して好評を得、又この事業が海外における諸先輩の認めるところとなり、先般来日のコチア産業組合専務理事下元健吉氏のキャンプ現地から移住問題が急速に進展し、これに対処するため本年度より移住教育を主目的とする青年隊を中部地方建設局高岡工事事務所管内に設置し訓練中でありましたが、今般ブラジル移植民會社により領事館を通じ正式に集団雇用移民の申し込みを受けましたので、本月初旬外務省移民局日本海外協会連合

会、家の光協会等の協力を得て適格者の選考を行い渡航手続を進めて居る次第であります。

移民引き受け会社におきましては契約事務締結並びに今後の計画移住の打ち合わせのため責任者の派遣を要請しており、青年隊員も三十三才を頭として二十名が異境のまったくの原始林に少なくとも一ケ年間の天幕生活を送るのでありますから、当方が責任を持って送出するためには是非とも事前に現地調査を行い生活様式は元より出来るだけの措置を講じ又、教育計画の樹立等今後の重要案件でもありますので、責任者の派遣を必要といたしますが、渡航費皆無の現況とありましては、如何とも致し方なくすべて外務省に依頼して居りましたのであります。

外務省におきましては、極力現地の状況を調査中でありましたが、事の重要性から担当者の派遣が必要であるとして往復旅費無料という異例の便宜を取り計らい審議會を経て建設事務官長澤亮太を渡航させることになりましたが、滞在旅費の官費支出の目途がないため自己負担により渡航することになりました。

この上は用務を完全に果た



せるよう各位の御援助により滞在費の調達を致したいと存じますので御多端の折恐縮に存じますが何卒御厚志を賜りますよう御依頼申し上げます次第で御座います。

敬具

これに計画局長前田稔、総務課長、都市計画課長、施設課長、水道課長、総合計画課長連名の概文が省内に飛んだ。

伊東の洗心荘は山手の丘高いところにあつて一望のもとに街の灯りがみえて展望のいいところであつた。

皆から激励の言葉や舞や歌をうけて一夜の歓談益を交わす回数数知れず、また課員の暖かな心に感謝する。皆は「よくここまで具体化したものだ、頑張ってくれよ」と励ましてくれた。

十二月二十八日

朝寺田さんと一緒に東急の人とともにブラジル大使館で査証をとり東京銀行でボンドに換えても

これで手続きを終わり、夕方早く家に戻って荷物をまとめて、八時すぎ家を出る。役所も協会も今日で終わりだからちようどけじめがついていい。駅は年末で混雑するから見送りはよいと遠慮してあつたが、十時の彗星号は湘南線ホームだったから待合室で待っていた課の人々が全部ホームに出てくれるようになった。課長夫妻それに課員は全員、野崎、引間等々ほとんど全員近く来てくれた。佐藤君もまた、福山、皆川は家から一緒だ。

九時過ぎ後藤先生も来られた。寺田さんが神戸まで同行してくれる。十時愈々出発だ。皆の努力と期待に応えて三等に乗りこむ。汽車はホームを滑り出した。見えなくなるまで手を振っている。いそがしかった。ようやく複雑な

一切と今断ち切れた思いがある。何だかほっとする。

その後、神戸港を十二月三十日に出港し翌年二月十五日リオデジヤネイロに入港しブラジルの地を踏むのである。

終戦詔書より三年目の昭和二十三年建設省が設置された。

当時国家の行く末は混沌としていた時期で、日本民族そのものが生き残れるのかどうかという危機感を国民の大多数が抱いていた時ではなかったかと同える。

日本民族生き残りのためには、世界から認めてもらえる日本人となることであり、それには国内の国土復興に若い青年を育成しつつ投入してきた国内事業展開を基盤に、青年の力を海外に向けるという構想と、その構想に官民一丸となって取り組もうとする精神と氣迫が日記より伝わってきた。長澤亮太建設事務官が建設大臣より辞令を交付され、振興課長自ら私財を投じ、省内に各課長連盟にて志を募り、建設業界からも協力を申し出る等、公務・法律以前に裸の日本人を見たような気がする。

(文筆責任者 土橋聡)

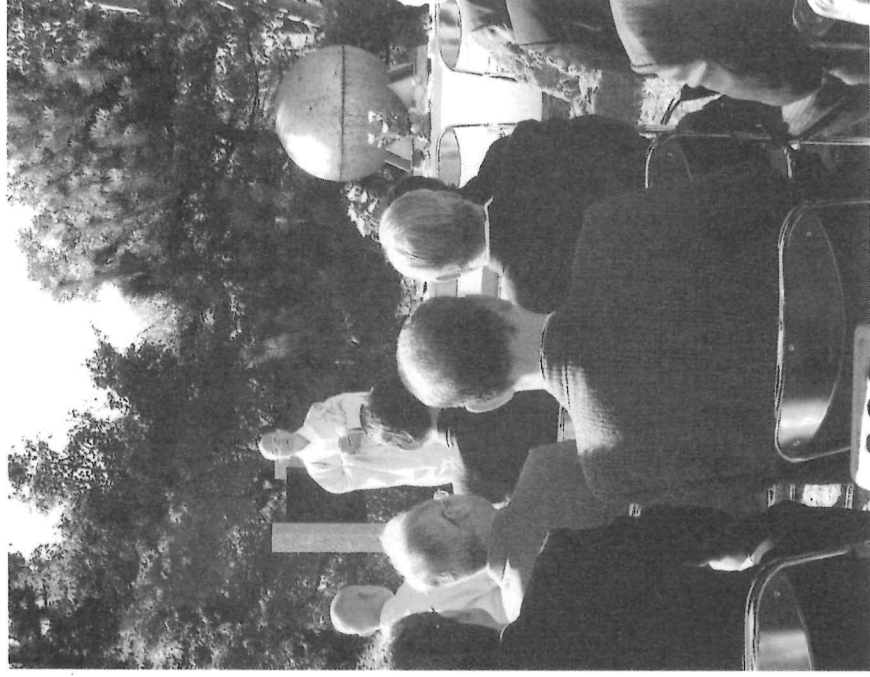


好天の下、偲ぶ会に
先立って当日午後1時
からセンター前の「留魂
の広場」で、産業開発青年隊
同窓会役員、同有志、関
係者有志により鎮魂の
儀が行われました。



鎮魂の儀 スナップ

鎮魂の儀式 スナップ



A black and white photograph of a memorial service. In the center, a portrait of a man is displayed on a stand, flanked by large, elaborate floral arrangements. To the left, a vertical banner reads "長澤亮太先生を偲ぶ会" (Memorial Service for Mr. Tetsuo Tani). In the foreground, the backs of several people's heads are visible as they look towards the altar. The setting appears to be an indoor hall or church.

[illegible]

富士の心
美し
隆之に
尊敬
あり
光太郎



参加者・协賛者名簿

加藤	加藤	永田	羽野	稻澤	井出	井伊	安達	阿部	阿光	福縣	鈴鈴	鈴木	江木	鈴鈴	林友	野山	掘上月	望上	淵上	浜八	柏梅	土海	渡井	田島	田中	長川	村谷	中竹	谷池
紀	勝彦	進治	靖二	俊平	則一	廣成	一之	範雄	浩尉	雅利	敏德	利木	江木	鈴木	鈴鈴	金友	隆俊	利月	康三	弘政	惠孝	健喜	良信	信信	隆三	義誠	政文	久彦	



偲ぶ会スナップ

参加者・協賛者名簿

大太村増前 浅川川 占 赤青西 西 清星世 菅菅 杉水 水 神森新 新 植城松 松 松庄庄 庄 小林林 林 林田田 田 小谷谷 谷 小池池 池 小宮内 内 岡井塚
 吉田松田 田 原野野 野 村口部 部 岡柳柳 柳 村富富 富 鶴紀紀 紀 健和 和 六文文 文 敏忠忠 忠 貴正正 正 仁 崇 照 屯 長 修 照 正 哲 国 泰 宏
 一男 夫 雄 力 人 弘 郎 仁 夫 三 美 雄 司 美 博 正 樹 夫 澄 男 明 文 一 志 充 博 史 徹 明 真 智 美 生 豐 浩 勉 男 士 雄 之 彦 弥 夫 進 盛 子 賢 治 基



○トナノハナニ



敬称略・順不同

望月則平
片原恒一
福岡功祐
服部安元
武田開治
飯嶋清吉
飯倉古秀
板垣木砂
八木秀昌
白馬場振興
日本文庫
內山重克
藤井孝彰
森川洋精
島袋精忠
渡邊敏聰
澤村保喜
田中喜一郎
淵由典弘
中崎和哲美彦
田野折功
天野和滋
吳野征德要
長谷川合
倉厚夫幸
張山島準
中島公清久義
中山村泰竹男
大瀧川石藏也三
大大城森哲共律憲俊
大大橋樑

(人)



山林

高村光太郎

私はいま山林にゐる。
 生来の離群性はなほりさうもないが、
 生活は卻(かえ)て解放された。
 村落社会に根をおろして
 世界と村落とをやがて結びつける気だ。
 強烈な土の魅力は私を捉へ、
 撃壊の民のころを今は知った。
 美は天然にみちみちて
 人を養ひ人をすくふ。
 こんなに心平らかな日のあることを
 私はかつて思はなかつた。
 おのれの暗愚をいやほど見たので、
 自分の業績のどんな評価をも快く容れ、
 自分に鞭する千の非難も素直にきく。
 それが社会の約束ならば
 よし極刑とても甘受しよう。
 詩は自然に生まれるし、

彫刻意欲はいよいよ燃えて
 古来の大家と日毎に交はる。
 無理なあがきは為(な)ようとせせず、
 しかし休まずじりじり進んで
 歩み尽きたらその日が終りだ。
 決して他の国でない日本の骨格が
 山林には厳として在る。
 世界に於けるわれらの国の存在理由も
 この骨格に基づくだらう。
 囲炉裏(いろり)にはイタヤの枝が燃えてゐる。
 炭焼く人と酪農について今日も語った。
 五月雨はふりしきり、
 田植のすんだ静かな部落に
 カッコウが和音の点々をやつてゐる。
 過去も遠く未来も遠い。

これは、長澤亮太先生が
 愛した詩です。

偲ぶ会スナップ

参加者・協賛者名簿

貞米北家古梶増池明本石大証須大今安山前野難十塚杉佐佐見小北神金小小受石東和鈴鈴鈴柳柳矢野野木妙妹牧北
 方野原田閑野子邊石間井野木直江井達元田平波鳥野村藤波橋野田子川田田木木木木澤瀬後島崎下本尾村
 政七高秀久博光博功督卓と匡仁秀欽廣文卯正賢鶴慶光敦英孝才陽多洋浩新徳幸能政善晃浩一
 仁男修志文茂大光嗣信隆俊太光清人介中子邦志子也巳也吉一治蔵子男子夫清智一克信明肇正郎男忠和啓善夫修郎次
 野土塩花増楠土中固望平阪牧金能高宗仁竹渡村升西西手後加大小阿安秋佐河盆市辻伊山南三弓上逢小若栗高
 島橋川輪山田田尾本月井口森谷野片藤内刃山内森森島藤茂野野萬達山野野原川藤崎泰鬼集坂嶋宮野沢
 あ美修孝方峰吉衛雅信則昌秀瑞朝良元美正皓俊哲博耕憲涼義正国光信龍一孝雅秀人盛樹志慶
 いおい咲治樹美仙徳強哲一之幸秋寛彦樹夫雄勉男茂二紀一二雄三俊嗣二子新幸光彦信彦郎幸久隆収一貴樹志慶